マンハッタン先生で行く異世界旅行

シド・ブランドーMk—Ⅳ（地底の住人）

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

なんか気が付いたら身に覚えのない砂浜の海岸に寝そべってた主人公。海の水を見るとあの有名な青い奴になっていた。この姿になった主人公はどんな生活を送るのか！

げんしライフ、スタート！

目　次

気が付いたら全身真っ青の光ってるやつになっていた。 ―――― 1
悪魔の実で言うとアトアトの実の原子人間てとこ？ ―――― 5
最強の船長と青い奴 ―――― 10

気が付いたら全身真っ青の光ってるやつになっていた。

なんか気が付いたら身に覚えのない砂浜の海岸に寝そべってた。あー、異世界転生やら異世界召喚やらのテンプレだなーと思いながら、テンプレのように鏡になった海の水で自分の姿を確認してみた。……あの青い有名な先生になってた。うん。

「マンハッタン先生じゃあねぇか！」

うん。思わず叫んじゃったわ。強すぎね？……え？ここアメコミみたいなトップ層の世界じゃないよね？そんな世界だったら俺ちゃん萎えるよ？もうこの力使ってこの無人島で隠居生活するよ？……ごめん。無人島は適当。

……ていうか、感情無くなるとかないよね？俺ちゃん彼女できたことないんだよ？知らんけど。もうできる限り美味い飯作って感情少しでも残しとかないと。

残ったらいいなぁ。と思ったけど今服着てなかった。もう毒されてるのかもしれない。マジで気を付けよう。

知らない人に能力、その他を説明しよう。

そもそもＤｒ．マンハッタンはアメコミの二大巨頭、ＤＣで１９８０年代に連載され

ていたウォッチメンに出てきた全身真っ青の光ったおっさんだ。そうなった経緯を簡単に説明すると、彼は事故によって塵も残らぬレベルに原子分解された後に自力で復活したヤベー奴。体毛がなく全身ツルッツルで服を着てない変質者。ちなみになんで光ってるのかと言うと、高速で原子の崩壊と維持が行われてるかららしい。

能力を説明する原子そのもの。この世界は全て原子で構成されている。それを全て操ることが出来る。原作では歩く原子爆弾なんて言われてた。

この能力を応用し、

・惑星間のテレポート
・巨大化・縮小化
・増殖
・原子を構築、分解し物を作ることが出来る。
・浮く。
・平行世界への干渉

その他色んなことができる。まぁ後々確認してみるわ。ガラスの家作ってそれ飛ばして旅行した事あったらしい。知らんけど。

とりあえず増殖してみた。

「(何の用だオリジナル。)」
「オリジナルとか言うなよ。君は僕で僕は君なんだろ?」
なんだこのワード、初めて使ったわ。君の名はかよ。それより複雑だけど。なんかすげぇめんどくさいことになりそうだな。
「(でも、今から1万、10万と数えられないくらい自分が増えていくんだぜ。オリジナルくらい決めとかないとほんとに感情無くなるぞ。……まぁ、そう考えるとぶっちゃけ感情無くなった方がいっその事良いかもしれんがね。)」
そう考えると頭痛くなってくるわ。……あ、向こうも頭いたそうにしてる。まぁそうだよな。だって同一人物だもんな。
「なぁ、この島で一生暮らしてもいいかなって思ってる。」
「(好きにすれば良いと思う。僕は君で君は僕だ。別に不満もない。まぁ、この能力だから基本的に別行動しても全く問題ないがな。)」
ドーン!
その時、この島に大きな音が鳴り響いた。
「なんの音だ?」
「(火山じゃないか?)」
「あぁ、火山ね。じゃあ島の奥の方行ってみるか。」

「（行ってみよう。）」

ガァァん！　ギィィン!!

奥に徒歩で行ってみると、大きなおっさん2人（知ってるやつ）がそれぞれ武器と盾持って決闘してた。うん。知ってる世界だわ。

「知ってるわこの世界。」

「（うん。知ってるなこの世界。）」

「じゃあ、せーので言おうぜ。」

「（いいぞ、）」

「せーの！」

「「ワンピース！（ワンピース）」」

こりゃあヌルゲーの予感ですわ。

悪魔の実で言うとアトアトの実の原子人間てとこ？

とりあえずドリーとブロギーに話しかけてみることにした。
「なぁ、あんたら巨人族って奴かい？」
「あぁそうさ！エルバフの戦士、ドリーと」
「ブロギーだ！」
あぁ、やっぱ正解だったな。知ってたけど。
それよりも
「やっぱあんたら貫禄あるなぁ。すげぇかっけえよ。感情なくしかけてたけどあんたら見て取り戻したね。」
「ガババババ！なんのことか分からんがそりゃあ良かった！」
前々から思ってたけどすげぇ笑い方だよなこの世界の人達。まぁ個性あって好きだけど。
「ゲギャギャギャギャ！……ところで、あんたらは双子かなんかか？」
まぁそりゃあ聞いてくるよね。だってまるっきり同じやつが目の前に２人も居るんだもの。聞いてこない方がおかしいよ。

「いや、僕達は2人で1人だ。」
「(僕はこいつだし、こいつは僕だ。)」
「悪魔の実の能力者か？」
「まぁ、そんなとこだよ。ドリー。」
「(あぁ、そんなところだ。ブロギー。)」
「そんなとこって言うことは違うのか」
　まぁ、能力は悪魔の実くらいしかないからな。
「海に入っても力が抜けなかったからね。実験に巻き込まれてこんな身体を手に入れたんだ。」
「す、すまんな。そんな話をさせちまって。」
「わ、悪かった。」
　暗い顔をして謝ってくれたドリーとブロギー。うん。優しいね。優しくて強いとか惚れてまう。男だけど。あ、もちのろんでＢＬ展開なんてないからね？そんな変な期待すんなよ？
「(いいよ。気にしないで。)」
「そこで僕はこの能力を悪魔の実の力ってことにしたんだ。」
「へぇ、なんて名前だ？」

「(アトアトの実の原子人間。)」
……しっくりくるのがこれくらいしか無かった。
「アトアトの実?」
「そう。アトムのアト。アトムって原子って意味なんだ。」
「そもそも原子ってなんなんだ?」
２人とも分からないって顔してるわ。まぁ、そうだよな。何年もこんな島でずっと戦い続けてるんだもんな。知るわけねぇな。
「(簡単に説明すると、この世の全ての物質の基礎となる物質。)」
「??どういうことだ?」
「すまん。言ってることが分からねぇ。」
簡潔に言いすぎて逆に伝わらなかったのかも。これは反省。
見てもらう方がいいかな。
「見てもらった方がわかりやすいから今からお披露目会するよ。」
「(なんかやって欲しいこととかあるか?)」
「ある程度のことなら出来るはず。」
あ、これ逆に困った顔してる。……じゃあ助け舟を出してみよう。
「困った顔してるね。じゃあなんでもいいなら今から軽く一通りやってみるね。」

「あぁ、よろしく頼む。」
「（見てるんだぞ。）」
　そっからお披露目会が1時間から2時間くらいおこなわれた。炎を出したり雷出したり自然現象をおおかた出した、他には家を建てて飛んだり乗り物を作ったり料理を振舞ったりした。分裂も数えられないくらい作った。最後に2人のサイズになってお披露目会は終了した。ぶっちゃけソレじゃあほとんど見せれなかったけど。
「ここまでくると何も言えねえよ。」
「今まで見たどんな能力者よりも凄かった。」
　2人がドン引きしてから1週間以上経ったある日。2人とすごい仲良くなった僕はいきなりだが別れの挨拶をした。
「2人とも済まない。この島を出ようと思っている。僕は色んなところに行ってみたいんだ。」
「ガババババ！俺たちにとめる権利はない！」
「ゲギャギャギャギャ！その通りだ！この世界の色んなことを見てくるといい！」
　良かった。2人とも笑顔でお見送りしてくれるようだ。
「ありがとう。最後は必ず冒険譚を語りにこの島に戻ってくるよ。」
「おう！期待して待ってるぜ！ガババババ！」

「語れないくらいの思い出作ってこいよ！ゲギャギャギャギャ！」
「あぁ、もちろんだ。行ってくるよ。」
「「行ってこい！」」
２人の元気な別れの挨拶を聞いて、作った家で空を飛びながらこの島を離れた。

最強の船長と青い奴

とりあえず今がどの時期なのかを探らなければ……お、ちょうどいいタイミングでニュースクーが飛んできた。
「ニュースクーよ、その新聞1部くれないか。」
最初は「こんな奇妙なやつ今まで見た事ないぞ、なんだコイツは」みたいな顔で見てきたが
「うむ…チップを渡そう。これでお前を世話しているやつに好物でも買ってもらえ。あと、カモメの好物はイワシと聞いたことがある。それもあげよう」
こういうと「クー」と嬉しそうに鳴いて新聞を1部渡してきた。
「ありがとう」
さてさてさて、今日の見出しはなんだろなぁっと。
『⊠悲報⊠ロックス海賊団　結成』
…おっと～マジかぁ。えらい時代に来ちまったもんだなぁ。
「(これはまずいな。能力がいくら最強とはいえ、まだ覇気は使えないんだ。出会った途

端殺すとか言われたら洒落にならんぞ。俺たち死なないが。)」
「まぁ、そこは工夫しだいだな。アダマンチウムやヴィブラニウムを生成してアーマーにしたりな。もしかしたら現物を見てないから再現が出来ないかもしれないが。」
「(それもそうだな。)」
「…!?ジハハハハ!おい見てみろよ船長!家が空飛んでるぞ!」
フラグ回収早すぎね?これ確実にシキの声じゃねぇか。
「はぁ?お前がフワフワの能力で浮かしただけだろ?そんなしょうもねぇことでいちいち俺を呼ぶな!嘘つくならもうちょいマシな嘘をつけ!」
船長ってことはこの声がロックスか?
「ちげぇんだって!ほら見てみろよ!俺が動かそうとしても動かねぇんだよ!!」
「…あぁ?…確かにその中にはなんか居るな。気配は2つあるが全く同じ。なんの能力者だ?」
まぁ…これは出るしかないか。
「…人の家になんのようだ?」
「てめぇか!俺の真似事みてぇなことしてる奴は!!何の能力者だ?」
「(教えても良いが教養無いやつだと理解するのに結構苦労するぞ。実際俺もかなり苦労したしな。)」

「うわっ！同じやつがまた出てきた！ほんとにどういう能力者だよ…。」
シキのやつびっくりしてるｗｗｗ
タイミングバッチリだな。
「全身真っ青とはな…。いっちょ俺と闘ってみねぇか？」
「そう言うと思った。だが、その提案にはのれないな。」
「何故だ!?俺がこんなに頼み込んでんのに!!」
「いや船長あんた頭すら下げてねぇじゃねえか。…だが、今世界を騒がせているやつの提案を断るのはかなりリスキーだろ。ちゃんと理由はあんのか？」
「(あぁ、ある。…そもそも試合にならない。俺はまだ覇気が使えないからな。俺の能力があんたに効かなかった場合、俺はあんたを倒せない。)」
「だが、かと言って俺も能力の影響で死ぬ事は無い。」
「(死んでも生き返る。だからあんたも俺を倒せない。)」
「交互に喋んな気持ちわりぃ!!」
「あっはっはっは！面白いなお前!!だが、お前は能力者だ。お前を海につき落とせば能力関係なしにお陀仏だろ。」
「海に入ってもなんの影響もなかった。多分、これもこの能力の影響。」
「はぁ？悪魔の実の能力者が海に沈まないってどういうことだ？ほんとに何の能力者

だ。ますます分かんねぇな。」
「(海で溺れないとか悪魔の実のルールに反しているが俺はこう名付けた。ロギア系悪魔の実『アトアトの実のアトム人間』)」
「アトムゥ?.何だそりゃあ?.」
　そりゃあシキは分かんねぇわな。
「ロックスは分かるか?」
「聞いたことあるような、ないようなって感じだな。…アトムってのは何なんだ?」
「(アトムとは原子のことだ。)」
「そして原子とは『この世の全ての物質の基礎となる物質』なんだ。例えば、炎、雷、水、土、木、空気、人、動物、この世界に存在するありとあらゆるものがこの原子でできている。」
「(それを操作したりできるのが俺の能力だ。)」
「だから、俺を完全消滅させても空気どころかお前たちが存在していたらそこから復活する。シキ、試しに俺を切ってみろ。覇気を纏わせても問題ない。」
「じゃあ遠慮なく切らしてもらうぜ。死んで後悔すんなよ!!」
　次の瞬間、俺の身体は真っ二つになった。
「流石は金獅子のシキ。」

「（剣術凄いな。見えなかったぞ。）」
「だから交互に喋んなって!!…ていうかマジで死なねぇんだな。覇気たっぷり込めて殺すつもりでやったのによ。癪に障るぜ。」
「…でどうやって再生するんだ？」
「いい質問だな。ロックス。再生方法は２つある。」
「（このまま上半身と下半身をくっつける方法か、そのまま分裂するかだ。）」
「こんなふうにな。」
「〈だから言っただろ。俺は死ぬことは無いと。〉」
「増えた!?」
「…ますますおもしれぇ奴だな。俺の船に乗れよ！」
「だから俺は海賊どころか賞金首ですらないんだって」
「〈だから、お前たちの船に乗る意味が無い。〉」
「（政府に加盟しているって訳でもないがな）」
「まぁもし賞金首になったらその時は考えてやるよ…それか、俺に覇気を教えてくれ。それが条件だ。」
「ニヤ）…良いだろう。教えてやる」
かくして俺は『ロックス海賊団』に入ることになった。